

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 ジャン＝ジョゼフ・スュラン研究—17世紀フランス神秘主義における体験と信仰
氏名 渡辺 優

本研究は、17世紀フランス最大の神秘家とも言われるジャン＝ジョゼフ・スュラン (Jean-Joseph Surin, 1600-1665) のテキストを、同時代に「神秘主義 (la mystique)」と呼ばれた思想潮流のなかに位置づけながら解釈し、とりわけ彼の信仰論の根源性を解明することで、従来の神秘主義理解を拡充しようとする試みである。

スュランの65年の人生は、端的に言って「体験から信仰へ」と要約できるような軌跡を描いている。ルダンの悪魔憑き事件 (1634-1637年) を発端に、およそ20年にも及んだ闇の時代を通じて、彼は数々の「超常の」体験を持った。それは、この世を生きる大多数の人々には垣間見ることすら許されぬ神の現前について、文字通り「みて、きいて、ふれる」ことを許す特権的な体験であった。しかし、後に彼はすべてのキリスト教信徒に「共通の」、そして一切の超常の体験を拭い去った「通常の」信仰の境涯にこそ、「神秘的合一」への道を見出すに至る。この間の消息を明らかにし、スュランにおける信仰の何たるかを解明することが本研究を貫く課題である。

最終的に信仰へと向かう彼の歩みは、17世紀フランスの歴史的・社会的・思想史的背景に照らし合わせるとき、真に豊かな相貌をみせる。とりわけ、あらゆる現前の体験を去った「純粹・赤裸な信仰」という近世神秘主義の「隠された主題」を取り出すこと、これが本研究の重要な戦略的糸口となる。幻視や脱魂などの「神秘体験」ではなく、「不在の他者」とのもうひとつの交わりのかたちである「神秘的信仰」をこそ主題化する本研究は、何か特別な「現前の体験」を神秘主義の——ひいては「宗教」そのものの——「本質」とみなしてきた従来の研究の趨勢を正面から問い直すものでもあるだろう。

本論に先立ち、序章では、議論のための基本的な前提を確認し、本研究の着眼点と全体的な方向性を提示する。17世紀フランス神秘主義については、本邦での研究の蓄積に乏しいことに鑑み、丁寧な記述を心がける。

本論は3部6章から成る。1章から最終章にかけて、「体験から信仰へ」と向かうスュランの霊的道程を幾度も往復しながら、複数の論点を有機的に連関させることによって徐々に考察を深めていくという重層的な構造をなしている。

第I部では、17世紀フランス神秘主義という問題の歴史的・社会的コンテクストを概観し、そのなかにスュランを位置づけることで、彼のテキストに内在するさまざまな矛盾や緊張、あるいはその止揚をあぶり出す。

第1章では、まず17世紀フランス神秘主義において「経験／体験 (expérience)」が新し

い知の権威の源泉とみなされるに至った歴史的背景を一瞥する。西欧近世における「神秘主義（*la mystique*）」という新しい学知——それはしばしば「経験／体験の学知（*la science expérimentale*）」と呼ばれた——の登場は、同時代における学知の構造的な大変動と地続きであった。中世的経験概念に代わって学知の根拠となった個人的「体験」は、神秘主義をめぐる言説の主題となり、今日に至るまで神秘主義のイメージを深く規定することになった。だが他方、同時代の神秘主義に目を凝らせば、あらゆる直接的体験を去った「純粹・赤裸な信仰」というテーマが現れてくる。我々は「証言」という概念を手がかりに、この神秘的信仰論の根源的性格を読み解いてみたい。典型的な「体験の学知」とみなされてきたスュランの神秘主義の精髓は、実に、一切の超常の体験を離れた信仰の境涯に見出せる。本章後半では、以下さらに探究されるべきスュランにおける信仰の輪郭を素描する。

神秘主義の興隆は、宗教的学知の担い手の変化という歴史社会的事象とも関連していた。近世神秘主義の「社会的地平」の拡がりを見通し、そこからスュランのテキストが持つ多声性を示すことが第2章のねらいである。17世紀には、神秘主義文献の翻訳と流通の拡大と相まって、高度に内面的な靈性が俗人信徒たちにも開かれたものとなる。と同時に、神学的学識を備えたエリートを、自己の体験から語り出す無学な一般信徒が圧倒するという光景が至るところで繰り返された。スュランもまた、宣教・司牧活動に奔走するなか、数多くの無名の信仰者と出会い、それが彼自身の靈的成熟を促す重要な契機となった。このイエズス会士の言葉は、歴史の陰に隠れてしまった信仰者たちの言行と呼応している。彼は、「しがなき人々」が証言する「共通・通常の信仰」に応答し、みずからもまた信仰の証言者となり、人々のあいだで、人々に向けて信仰の内なる神秘を語り出していったのである。

第II部では、近世に神秘主義をめぐる戦わされた諸々の論争に焦点をおく。一つの主題や観念について提示されたさまざまな解釈を対比することで、スュランの神秘主義をより立体的に捉えることができるだろう。

第3章では、反神秘主義的思潮に対するスュランの闘争ないし応答を考察する。第一の論点は「体験」である。しばしば「超常の」という形容詞を冠して語られた神秘家たちの体験は、17世紀を通じて激化していった神秘主義の真正性をめぐる論争のなかでも最大の焦点となった。だが本章で確かめたいのは、超常の体験をめぐる論争の果てに、スュランが「共通・通常の信仰」をこそ主題とするに至ったということである。「体験から信仰へ」という彼の神秘主義の転回に決定的な影響を与えたのは、「暗夜」の教説で知られる16世紀スペインの神秘家、十字架のヨハネの特異な信仰論であった。ヨハネのスュランに対する影響を明らかにすることで、我々は、従来の研究では神秘主義退潮の典型的徴候と捉えられてきたスュランの信仰「回帰」を、彼の神秘主義に独自の創造的展開として読み解きたい。その際、目を凝らすべきは、神秘家の言葉が生まれてくる源に蠢く「願望（*désir*）」である。

第4章の陰の主役も十字架のヨハネである。本章の議論を導く二つのキーワードは、「純粹・赤裸な信仰」の概念と「純粹な愛」の概念である。密接に結びつきながらも位相を異にするこの二つの概念に注目して、17世紀フランスにおける十字架のヨハネ解釈の多様性を検討し、

そこからスュランの信仰論の特異性・根源性を明らかにする。十字架のヨハネは近世フランス神秘主義の盛衰を左右するほどの影響力をもったが、スュランこそはその最も創造的な解釈者だった。本章後半では、フェヌロンとスュランの思想を比較する。ともに魂の「暗夜」とそれに伴う絶望を稀有なやり方で生きたこの両者が歩んだ霊的道程は、或るところまではたしかに重なっているながらも、決定的な点で袂を分かち。この点に注目することで、フェヌロンが体系化した「純粋な愛」の教説の陥穽を超えていったスュランの「純粋な信仰」がいかなるものであるかを照らし出すことができる。

第 III 部において、我々はいよいよスュランの神秘主義の精髓たる「信仰」を、彼のテキストに即して論じてゆく。

第 5 章では、「信じること」と時間性の構造のあいだには本質的な一致が認められるという着眼点より出立して、スュランの神秘主義における信仰の境位をさまざまな角度から探求する。はじめに前景化するのは、スュランの聖霊論であり、あるいは聖霊の到来に先立つ「イエスの出立」という始原の出来事に彼が与えた意味である。人々のあいだに現前した神がこの世から去って行ってしまったということ、もはやそこにはいないというまさにそのことが、神との新しい関係を許す＝可能にする。だとすれば、現前の体験からの「隔たり」は、もはや乗り越えるべき（悪しき）事態ではない。スュランという神秘家は、現在が過去へと過ぎ去りゆくことによって現在に未来が到来するという時の流れへの鋭敏な感覚の持ち主であった。けっして乗り越えられない断絶を設けつつ変転してゆく時間。が、それゆえに他者性にかかれた時間。スュランの言う「信仰の状態」は、まさにそのような時の変転のなかに見出される。移ろいゆく時の流れのなかにながら、その都度に新しい時の訪れにかかっていることによって、別様の言語による、他者（神であり、他人たちでもある）との別様の交わりを可能にする地平としてそれはあるだろう。

第 6 章では、スュランが到達した信仰の境地における「合一」と「平安」を論じる。あらゆる差異の彼方に到来するというこの信仰の平安は、それ自体が神との「合一」の境涯である。だがこの「合一」は、いかなる意味でも「融合」ではなく、神に向かって上昇してゆく霊的階梯の最終到達点でもない。彼によれば、信仰の状態にある魂は「神を求めての永久の不安・揺らめき」のなかにある。あるいはまた、神から隔てられてあることに起因する信仰につきものの闇も、闇を隈なく照らし出す現前の光のなかに消失してしまうわけではない。神秘を覆う「信仰のヴェール」はついに取り去られることなく、魂は「神の栄光の永遠の城外区」に留まり続ける。だがその闇は、現前の欠如態としての、現前によって乗り越えられるべき否定的な闇ではない。過ぎ去ってしまった他者、もはや現前しない他者、未だ到来せざる他者の到来を「待つこと (attendre)」そのものとして捉えられるスュランの信仰は、何処からかやって来るであろう他者——神であり、かつこの世の他者たちでもある——に向けて、愛に満ちた闇のなかで、常におのれを開き、曝しておくという歓待の姿勢である。現前しない他者が、しかし今なお生ける他者として臨在するこの境涯に、彼の説く「生ける信仰」の平安は見出されるだろう。

結論では、シュランの神秘主義を改めて大きな歴史的見通しのなかに位置づけるとともに、従来の神秘主義理解には収まらないその根源的・逸脱的性格を、彼がうたった詩の一節を解釈することを通じて確かめ、もって結びとする。